

平和を求めて  
 (25)  
 私の町の戦争跡

練馬区

緑あふれる光が丘一帯は  
 「皇居、帝都防衛」のための成増飛行場だった



光が丘公園の一角にある「平和記念碑」(練馬区II写真上)には「帝都(皇都)防衛のため、成増飛行場がつくられ、多くの若い命が空に散っていった。地元住民

飛行場の住所は、「板橋区練馬高松町」でしたが、飛行場の呼称は「練馬飛行場」ではなく「成増飛行場」と呼ばれました。練馬地域は「練馬大根」の生産地で、世界にも輸出され「練馬」の地名が海外にも知れ渡っていったからといえます。



しかし高度一万尺以上

終戦後まもなく、成増飛行場は米軍に接収され、米軍人の家族宿舎が建設されました。第18代米大統領グラントの名をとって「グラントハイツ」と呼ばれました。返還を求める住民世論と運動を背景に一九七三(昭和47)年日本に返還され、住宅や公園になりました。

なお、成増飛行場の遺跡として「掩体壕」が一基だけ存在しますが、個人の住宅に組み込まれ立ち入りも写真撮影もできません。

(資料「練馬小史」ほかを参照しました)

一九四二(昭和17)年四月十八日、米空母から飛び立ったB25爆撃機十数機が、突如東京上空にあらわれ爆撃を加え飛び去っていきました。この空襲での東京の被害は死者39人、家屋損害262戸。いわゆるドウリットル空襲でした。

強制的に  
 立ち退かされた住民

練馬区光が丘地域には高層住宅と公園(写真下)がひろがっています。光が丘がかつては飛行場だったことを知る人は少ないかもしれません。

この本土初空襲が政府・軍部に大きな衝撃をあたらせ、皇居の存在する「帝都防衛」のための飛行場建設が急務とされました。飛行場の条件は都心へ離陸3分以内で到着できることで、その適地としてこの地が選ばれました。

一九四三(昭和18)年六月、予定地の地主五〇名は突然、実印持参で板橋区役所(当時は板橋区)に招集されました。「窓口で職員から印鑑の提出を求められ、渡すとなにやら書類に印を押していたが、それが土地明け渡し承諾書だった」(練馬区戦争体験集「平和への架け橋」と半ば強制的に土地を取り上げられました。

練馬大根と  
 飛行場の呼称

飛行場建設は、六〇日以内の期限で地主を立ち退かせ、刑務所の囚人、朝鮮人労務者なども動員して突貫工事ですすめられました。完成した成増飛行場は、滑走路、高射砲陣地、探照灯、対空機関砲陣地、掩体壕(えんたいごう)、陸軍病院などの施設を含み一大基地となりました。

特攻隊の基地に

成増飛行場に配属されたのは飛行47戦隊。赤穂義士の四十七士にあやかったもので「空の新撰組」と称され、胴体には山鹿流陣太鼓のマークが描かれていたそうです。

戦後はグラントハイツ

増飛行場」と呼ばれました。練馬地域は「練馬大根」の生産地で、世界にも輸出され「練馬」の地名が海外にも知れ渡っていったからといえます。

増飛行場」と呼ばれました。練馬地域は「練馬大根」の生産地で、世界にも輸出され「練馬」の地名が海外にも知れ渡っていったからといえます。